【145】

氏　名(本　籍)	鷲尾龍一(わしおりゅういち)(神奈川県)
学位の種類	博　士(言語学)
学位記番号	博乙第 1,004 号
学位授与年月日	平成 6 年 7 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	Interpreting Voice : A Case Study in Lexical Semantics (ヴォイスの意味解釈：語彙意味論の事例研究)

主　査	筑波大学教授	Ph. D.	中右　実
副　査	筑波大学教授	Ph. D.	原口庄輔
副　査	筑波大学教授	Ph. D.	角田太作
副　査	筑波大学助教授		城生伯太郎
副　査	筑波大学助教授	文学博士	廣瀬幸生

論　文　の　要　旨

本研究は日本語，朝鮮語，モンゴル語，英語，フランス語，ドイツ語などに基づく実証的な対照言語研究で，人間言語の普遍性と個別性を経験的かつ理論的に峻別しようとする試みである。具体的には，いわゆる直接受動と間接受動を含め受動構文が使役構文と経験的に接点を結ぶという事実に着目し，そこに含まれる言語事実をひとつのパラダイムのもとに包括する統一的説明理論を構築しようする試みである。本研究は生成文法理論を一般的な記述の枠組みとして採択し，それゆえ究極的には普遍文法理論，なかでも語彙意味論分野における理論的精密化に貢献することを目標としている。

本論文の構成は全体で五つの章から成り立っている。第 1 章「序説」では，問題の所在が明らかにされる。第 2 章ではとくに「間接受動の性質」が詳論される。第 3 章では「使役構文に見られる受動的意味の性質」が指摘され，その意味合いが突き詰められる。第 4 章では「モンゴル語におけるヴォイスの形式と意味」について実証的な分析と考察が加えられる。最後の第 5 章では，以上で観察された諸言語の事実を踏まえ，「概念意味論による分析と理論的提案」がなされる。

一般に受動現象には，いわゆる直接受動のほかに間接受動と呼ばれるタイプのものがあり，典型的には日本語の次の文が間接受動の例である。

(1)　お父さんが子供に髪の毛を引っ張られた。

(2)　ぼくは妻に泣かれた。

(1)は目的語を含んだ間接受動であり，また(2)は自動詞の間接受動化の例であることが注目される。こ

ういった間接受動の存在は一般理論的に次のような問題を提起する。

① 間接受動はどのような統語論的性質をもつのか。

② これは日本語に固有の形式であるのか。

③ 間接受動が許されない言語ではどのような形式がその役割を担うのか。

④ その形式と間接受動とはどのような関係にあるのか。

これらの問題設定が本研究の記述の方向を規定し，①は第2章で，また②から④は第3章以降で扱われる。

第2章では①の間接受動の統語論的性質が分析される。間接受動は文頭に文法項を伴う非人称受動である（たとえばドイツ語 *Es wurde gestern von uns getanzt.*）と捉え，間接受動の普遍的性質と個別的性質が区別される。こうした性質をすべて備えた形式が日本語以外にもみられるかどうかが，上記②の問題提起であるが，英仏独語などヨーロッパ諸語には，間接受動に直接対応する受動形式が存在しないことが観察される。

日本語に比較的近いモンゴル語でも，受動形態素を含む間接受動は許容度が極めて低いが，受動形態素を使役形態素に置き換えてみると，間接受動と類似の意味を表わす適格文が得られる。このことから，モンゴル語の使役文は使役と受動の両様の解釈を許す形式であり，日本語の間接受動に対応するモンゴル語の形式は受動構文ではなくむしろ使役構文であると結論される。この結論は次のような新たな問題を提起する。

⑤ 使役の形式が受動の意味を表わしうるのはなぜか。

この問題こそが本研究の中心テーマであり，第5章はこの問題の理論的解説を目標としている。

⑤の問題に一般理論的な答えを出すためには，使役形が受動の解釈を受けるという現象が，対照言語学的にみて，どの程度一般性をもつものか，それをあらかじめ明らかにしておく必要がある。第3章では，フランス語などに見られる類似の現象（*Jean s'est fait voler sa montre.*／*John had his watch stolen.*）を取り上げ，これが一般性の高い現象であり，諸言語における使役形と日本語の受動形との関係について考察する。モンゴル語だけでなく中国語などにも同様の現象が知られている。

ところが，朝鮮語では日本語の(3)に当たる(4)のような表現が許される。

(3) ジョンがメアリーに髪を切られた。

(4) *John-i Mary-eykey melithel-ul kkakk-i-ess-ta.*

朝鮮語の(4)は従来，日本語の間接受動文(3)と同様に分析されてたきたが，ここにはこれまで気づかれなかった重要な違いがあることが指摘される。すなわち，目的語の「髪」が日本語ではジョンの髪でもメアリーの髪でもありうるのに対し，朝鮮語ではジョンの髪でしかありえない。つまり朝鮮語では問題の目的語が主語とのみ結びつけられる。これは「主語が出来事に含まれる」という関係（これを *Inclusion* と名づける）が成立しなければならないことを意味する。それによって「ジョンが自分の髪を切られた」という解釈が出てくる。朝鮮語ではこの解釈しか成り立たないという点が日本語と違うところである。

すでに第2章で論じられているが，朝鮮語では自動詞の受動化は許されない。これまでにこの事実

を原理的に説明した研究はなかったが，(4)に関する事実を考え合わせれば説明がつく。自動詞の受動化ではそもそも「主語が出来事に含まれる」という関係は生じえないので，結局はこの制約に違反していることになる。かくして，(4)の解釈の一義性と自動詞受動文の非容認性は，同一の原理によって統率されていると結論される。

ところが，(4)の文についてもうひとつ重要な事実がある。目的語の「髪」をメアリーの髪と解釈すると，受動文としては不適格であるとしても，使役としては解釈できるのである。それゆえ(4)は，使役と受動の両義性を備えた使役形式とみなし，「主語が出来事に含まれる」ときにのみ受動の解釈が許されるとみることができる。

各言語の観察をまとめると，(4)の朝鮮語は，モンゴル語，英語，中国語，フランス語などに見られる使役形が受動の意味を表わすという現象と平行的に捉えられることになる。しかも，使役形において「主語が出来事に含まれる」場合にのみ受動の解釈ができるという一般化が，朝鮮語以外の言語にも等しくあてはまる。たとえばフランス語では，使役構文が受動の意味を表わすためには，主文に再帰形が生じていなければならない（いわゆる *se faire* 構文)。この場合，再帰形は不定詞節における対格名詞句あるいは与格名詞句に対応するが，再帰形であるから当然，主文主語とも関係づけられる。*se faire* 構文はしたがって「主語が出来事に含まれる」という関係を常に満たすことになり，朝鮮語とフランス語は，この関係を明示する形式が統語論的に表示されるか否かを除き，まったく同じ原理によって統率されていることが判明する。

以上の各章を通じて観察された事実を踏まえて，受動構文と使役構文に共通した性質と個別的性質とが語彙意味論的レベルで定式化される。技術的細部は別にして，わかりやすく図式的にいえば，次のようになる。使役と中立受動（直接受動）と被害受動（間接受動）は深いところで同一の概念構造を共有し，それに対し被動性原理（*Affectedness Principle*）と称する一般原理が適用され，それぞれに特有な概念構造が派生されるとするものである。ここで被動性原理の適用条件が個別的性質を決定するものである。これによって，異言語間と同一言語内とを問わず，形式上の相違にもかかわらず，概念構造において使役と受動が体系的な関連性を有することが的確に捉えられている。

審　査　の　要　旨

本研究を動機づけた問題意識は健全であり，それに裏打ちされた問題設定は十分に緻密で用意周到なものである。これまで使役と受動の研究はその大半が個別論であり，しかもそれぞれの領域内で対照研究が進められるという傾向にあったが，著者の出発点はむしろそれを超えたところにあり，使役と受動がどこかで深くつながっているとする経験的確信に本研究の動機づけがある。なかでも決定的に重要なのは，使役の形式が受動の意味を表わしうるのはなぜかという問題設定であり，本論文はこの問題に一般理論的な答えを出すという目標に収斂してゆく形で構成されている。第５章で提示される理論は概念意味論と称される一般的枠組みに依拠しながらも，その自然な延長線上に独自の特定理論を組み立てている。使役と受動がどこかで深く接点を結ぶとする確かな直観がはじめて明確な輪郭

を与えられたといえる。使役と受動が形式的には多様であり，しかも使役の形式が受動の意味を表わしうるという事実が与えられれば，使役と受動の意味論的側面にこそ共通性を発見しようとする試みはまったく自然な道筋であり，それだけにこの結論は説得力をもつものである。

第5章で示された理論的提案の意味合いは十分に大きく，新しい可能性を開くものである。とりわけ，概念構造の間に写像関係を認めるという側面は，従来の概念意味論には見られないものであり，こうした理論的革新が自然言語の形式と意味の対応関係を理解するのに非常に有益であることを強く示唆している。また本研究の方向がまちがいでなければ，受動の解釈を許す形式が使役形に限定される理由はなくなるため，受動の意味は他の形式によっても表現されうることを予測する。この予測は実際，フランス語の知覚動詞構文，ドイツ語の *Rezipientenpassiv,* 日本語の「てもらう」の構文などの事実観察からも検証される。その結果，*SUPER TIER* と称される新しいタイプの記述レベルの提案もなされている。これは既存の枠組みの延長線上に自然に位置づけられるものなので，そのかぎりでその妥当性が保証される。

分析の対象となった言語は類型論的にみても多様性に富むが，研究領域は受動と使役の言語現象に限定されている。こうした境界設定は一般的に正当化されることで，それ自体に問題はないとしても，多様な言語を対象としたために，言語によっては（たとえばモンゴル語で）資料の選択と扱いに異論の余地がないわけではない。とはいえ，それも突き詰めてみると，議論の本筋を変えるものではないことが確認される。全体として資料の選択は当を得たものであり，それぞれの言語で決定的にかかわり合ってくる典型的な用例が厳選されているので，たとえ新たに別個の資料が加えられたとしても，著者の枠組みは基本的には崩れないものと推論される。もちろん，事実観察と理論的細部の両面においてさらなる質的向上を期待する余地がないわけではなく，これは今後の課題である。

本研究を全体としてみれば，十分に精緻な事実観察と明晰な理論的展開と，それに達意の英語で書かれた本格的な専門論文である。普遍文法の視野のもとで受動・使役現象をひとつのパラダイムのもとに捉えた理論的研究は本研究を除いてほかにはなく，世界的水準をゆく独自の貢献として高く評価される。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。